《論　文》

雑誌『みくに』掲載の多田顯「みくに經濟學講座」
―反ユダヤ的言論をめぐる諸問題―

加藤知子
星城大学経営学部

Abstract

The purpose of this paper is to place TADA Akira's economics articles of the *Mikuni* magazines in the historical context of early Showa-era Japan. The analytical standpoint is that anti-Jewish speeches flourished in Japan before and during World War II. Tada's *Mikuni* articles were riddled with anti-Jewish remarks such as the claim that Jews were behind the propagation of Adam SMITH's economic liberalism, which Tada believed would undermine existence of nation-states. The *Mikuni* magazines were a pillar of the Japanese Christian *Mikuni* movement, started by IMAIZUMI Genkichi; however, they gradually shifted away from Christianity. Western Christians did not abandon their faith due to anti-Jewish ideas because they believed that Christian Church had superseded Judaism. Contrastingly, the *Mikuni* followers parted from Christianity, the root of which was Judaism. The Japanese anti-Jewish publications from before and during World War II have largely remained forgotten and untouched, offering substantial research opportunities especially in 2023 as the Jewish Question that was prominent in the first half of the 20th century seems to have resurfaced. Tada's post-war articles on Japanese economic histories and the religious, ethical ideas behind them are also worthy of future studies.

キーワード：『みくに』、多田顯、みくに經濟學講座、反ユダヤ的言論、第二次世界大戦

Ⅰ．はじめに

本論文の目的は、キリスト教系最右翼とされる雑誌『みくに』（主筆は今泉源吉）掲載の、多田顯著「みくに經濟學講座」（以下、「經濟學講座」と称する）に見える反ユダヤ的言論を紹介し、それが、昭和初期の日本に広まっていた反ユダヤ的言論の文脈の中にあることを示すことである。昭和初期の反ユダヤ的言論人は「敗戦とともに忽然姿を隠してしまっていた」[1)]という。いうなれば、昭和初期の日本における反ユダヤ的言論は、戦後、失われた事実となったわけであるが、多田顯の記事を扱うことにより、その事実を取り戻す一助ともしたい。歴史は事実に基づいて語られる。我々は全知全能の神ではないので、手にし得る事実に

は限界がある。その意味で―歪みを意図して事実を選択している場合でなくとも―我々が真実だと信じている歴史は歪んだものである。そして、そのような歪みがあること（歴史に限らず、他の領域でも）を意識することが重要である。そのような意識があるからこそ、批判的検証が可能になるのではないか。失われた歴史的事実の断片が現れた時、批判的検証に対して心が開かれているなら、その断片を見逃すことなく、新たな歴史の語りがより可能になるだろう。

最右翼とはいえ日本的キリスト教系雑誌として出発した『みくに』は、次第に昭和維新的（攘夷・神洲防衛的）反キリスト教系雑誌となっていく。その理由の一つとしては、当時の軍事的状況による外圧（当時日本のキリスト教界は戦時統制下にあった）というよりも、自ら取り込み育んだ反ユダヤ的言論にある。1930 年代と 1940 年代前半、日本はもとより世界各地で反ユダヤ的言論が広がっていた。『みくに』はこれを吸収したのである。多田顯の文章も例外ではなく、日本の国益を損ねているとされるユダヤの陰謀から日本を護るという対ユダヤ警戒の主張が見られる。

20 世紀初頭、反ユダヤの根拠の一つとされたのは『シオン賢者のプロトコル』（以下『プロトコル』と称する）であるが、その世界への広がりは、「『プロトコル』世界を席捲す」と題されたコーン（1986）第 7 章に詳しい [2)]。しかしながら、『プロトコル』が反ユダヤの始めではなく、反ユダヤの歴史は長い。黒川（1997）にその詳細がある [3)]。

イスラエル支援者が多い福音派キリスト教徒の勢いと、イスラエルと米国との同盟関係に隠れているからなのかもしれないが、米国においても反ユダヤ的言論や運動がある。米国でのユダヤ人迫害については、佐藤（2000）にコンパクトにまとめられており、ヘンリー・フォードの反ユダヤ的発言の他、米国の大学におけるユダヤ人入学者排斥が紹介されている。ユダヤ教会堂への爆破行為、ユダヤ人と黒人との対立など、第二次世界大戦後になっても米国には根強い反ユダヤの動きがあるという [4)]。

西平（1992）にあるように、日本で世論調査が行われたのは 1945 年頃からである [5)]。よって、1930 年代・40 年代前半の日本の反ユダヤについての世論調査などは提示できないが、グッドマン・宮澤（1999）では、明治期からの日本における反ユダヤ的潮流を紹介している。早くも 1883 年の『ベニスの商人』翻訳出版は大成功を収めているという [6)]。宮澤（1982）でも 20 世紀前半の反ユダヤ的動きがまとめられている。その中には、ユダヤ問題とキリスト再臨信仰のために弾圧されたキリスト教一派きよめ会に対する言及もある [1]。日本ではユダヤ人は迫害されるほどの人数がいなかったかもしれないが、ユダヤ人を支援したキリスト教徒は特に迫害されたのである。日本における反ユダヤ的言論については、第Ⅳ章でも更に言及する。

本稿は、日本地域資源開発経営学会第 10 回大会（2021 年 7 月 17 日発表）の内容 [7]に加筆・修正を加えたものである。すなわち、2021 年発表時には含めることができなかった、昭和初期の日本における反ユダヤ的発言についてや、反ユダヤ主義の定義をめぐる論議についても加藤（2023b）[8]に言及しながら加筆した。更に、反ユダヤ主義の定義の複雑さとそれをめぐる議論があることから、発表時の題目「雑誌『みくに』掲載の多田顯「みくに經濟學講座」―反ユダヤ主義をめぐる諸問題―」中、「反ユダヤ主義」を「反ユダヤ的言論」と改めた。

本稿の次章以降の構成は次のとおりである。第Ⅱ章で研究手法、リサーチの対象ならびに先行研究について言及する。今泉と多田の略歴にも触れる。次に、第Ⅲ章で『みくに』に掲載された多田による「經濟學講座」を含む記事を紹介する。多田の経済学的記事が登場するのは第 8 巻 2 号以降であるため、同号以降の記事に見られる「ユダヤ」「謀略」などの語彙の出現数を示す。第Ⅳ章では、多田のアダム・スミス解釈や見解―スミスの学説と反ユダヤとの結節―についてまとめ、多田の「經濟學講座」が、昭和初期の日本に広まっていた反ユダヤ的言論の文脈の中にあることを示す。第Ⅴ章では、第Ⅰ章からⅣ章まで触れられなかった事柄と今後の研究の可能性について述べる。

『みくに』は第二次世界大戦後、その存在さえも知る人が少なくなっていたが、名古屋市在住（2023 年現在）の大島純男・長子夫妻宅に全号・全巻が残されていた。夫妻には、貴重な『みくに』誌を閲覧させていただき、また、『みくに』や主筆今泉源吉について豊富な情報を頂戴している。資料散逸を防ぐため、閲覧等は大島宅での作業となった。夫妻のご自宅で作業をさせていただいたことに心より御礼申し上げる。また、英語要旨の確認はニコラス・ジェームズ・ホールズワース氏が、多忙な中時間を割き担ってくださった。併せて感謝申し上げる。ただし、本論文の考察や見解は本論文筆者のものであり、また、文責も本論文筆者に帰する。なお、旧字体・旧仮名遣いは、『みくに』等文献からの引用（復刻されているものについては復刻版から引用）の場合と固有名詞はそのままに、それ以外は新字体・新仮名遣いに、とした。本稿は、2020 年度・2021 年度・2022 年度星城大学経営学部研究費を受けて執筆されている。

Ⅱ．研究手法・リサーチの対象・先行研究

本論文の研究手法は文献研究であり、研究対象は雑誌『みくに』収録の、多田顯「經濟學講座」である。1943 年の 3 月号をもって『みくに』は終了したので、「經濟學講座」は、『みくに』後期における連載である。多田の記事を昭和初期の歴史的文脈に位置づけるため、昭和初期の主だった反ユダヤ的言論人による文献、ならびに、日本における、ユダヤ・イスラエル論議（反ユダヤ主義も含む）、昭和初期の歴史について論考した文献も用いる。これらの文献の書誌情報を表 1 にまとめている。

『みくに』は昭和初期、今泉源吉が中心となって進めた日本的キリスト教の一種「みくに」運動の柱である。同運動・同雑誌についての先行研究は多くはないが、いくつかの文献を挙げることができる。明治期に日本にキリスト教が伝道され始めて後、土着化の過程で少なからず日本的キリスト教が生まれたので、「みくに」運動誕生そのものが珍しいわけではない。内村鑑三の無教会運動も日本的キリスト教の流れに位置づけられる。「みくに」運動についての先行研究と、日本的キリスト教の類型、日本生まれのキリスト教の具体例についての文献を表 2 にまとめている。

（表 1）研究対象となる文献・補完する文献・視点を得るための文献

多田顯による記事
多田顯：みくに經濟學講座．みくに第 8 巻 2 号，1942a．
多田顯：みくに經濟學講座（第二講）．みくに第 8 巻 3 号，1942b．
多田顯：みくに經濟學講座（第三講）．みくに第 8 巻 4 号，1942c．
昭和初期の歴史的・反ユダヤ的言論の文脈を示すための文献
國際政經學会編著（船瀬俊介監修）：國際秘密力の研究 第一冊上・下．ともはつよし社，2017［初版 1936 年，國際秘密力の研究第一冊 上・下．国際政經学会］．
四王天延孝：猶太思想及運動上・下．ともはつよし社，2016［初版 1941 年，猶太思想及運動．内外書房］．
包荒子：世界革命之裏面 再版．二酉社，1925．※包荒子は安江仙弘のペンネーム
安江仙弘：ユダヤの人々．ともはつよし社，2015［初版 1937 年，ユダヤの人々．財團法人軍人會館出版部］．
宮澤正典：ユダヤ人論考 増補：日本における論議の追跡．新泉社，1982．
宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1877-1988．新泉社，1990．
宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1989-2004．昭和堂，2005．
宮澤正典：近代日本のユダヤ論議．思文閣出版，2015．
橋川文三：昭和維新試論．朝日新聞社，1984．

出所：筆者作成

（表 2）「みくに」運動、日本的キリスト教の類型、日本生まれのキリスト教の具体例についての文献

「みくに」運動・雑誌『みくに』に関する先行研究（学会発表も含む）
大久保正禎：戦時下「日本的基督教」の内面史 今泉源吉に見る「みくに運動」への道程．（「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」研究会）富坂キリスト教センター紀要 8：35-53，2018．
大島純男：今泉源吉と「みくに」運動．金城学院大学論集 173：17-41，1997．
大島純男：池田千尋と「みくに」運動．金城学院大学論集 178：1-29，1998．
大島純男：共助会と「みくに」運動．共助二・三月号：13-36，2000．
加藤知子：雑誌『みくに』掲載の多田顯「みくに經濟學講座」：反ユダヤ主義をめぐる諸問題．日本地域資源開発経営学会　第 10 回大会，2021 年 7 月 17 日，星城大学，Zoom 開催，2021．
加藤知子：日本的キリスト教についての一考察：今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義から、日本キリスト教界が受けた弾圧を読み解く．星城大学研究紀要 22：21-36，2022．
加藤知子：今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義と反グローバル主義：第二次世界大戦中の『みくに』「賀川豊彦氏の思想批判特輯號」から読み解く．星城大学研究紀要 23：1-16，2023a．

加藤知子：反ユダヤ主義の定義をめぐる一考察：20 世紀前半の中国大陸における日猶経済関係に着目して．2023 Conference on Economics and Business，5th of May, 2023，College of Finance and Economics，Aletheia University, New Taipei City, Taiwan，オンライン参加，2023b.
加山久夫：戦時下の賀川豊彦：「みくに」運動による賀川批判を中心として．明治学院大学キリスト教研究所紀要 37：93-130，2005.
小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題．神学 56：221-249，1994.
小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題：福元利之助にとっての「みくに運動」．神学 59：231-246，1997.
藤巻孝之：みくに運動の軌跡：一つの証言：付 山梨公会の場合．キリスト教史談会パンフレット❶⑦，キリスト教史談会，1983.
藤巻孝之：「みくに」運動の軌跡．共助二・三月号：37-45，2000.
日本的キリスト教の類型と日本生まれのキリスト教の具体例に関する先行研究
笠原芳光：「日本的キリスト教」批判．キリスト教社会問題研究 22：114-139，1974.
マーク・R・マリンズ（高崎恵訳）：メイド・イン・ジャパンのキリスト教．トランスビュー，2005［Mullins, M. R.: Christianity Made in Japan: A Study of Indigenous Movements］． ※「みくに」運動は含まれていない。

出所：筆者作成

多田顯の記事について論じる前に、『みくに』主筆の今泉源吉と、多田顯の略歴に触れておきたい。今泉源吉は 1891 年生まれ、法律家であると共に、日本キリスト教団中渋谷教会長老牧師を務めるなど、キリスト教伝道にも従事した。1935 年から 1943 年まで月刊誌『みくに』発行に携わった [9)10)11)]。源吉の母みねは蘭学の名門桂川家の出身である。第二次世界大戦後の源吉は桂川家に関する著作に没頭し、大著『蘭学の家桂川の人々』『蘭学の家桂川の人々〈続編〉』『蘭学の家桂川の人々〈最終篇〉』を完成させた。みねの談は『みくに』に連載されていたものがまとめられて 1940 年に自費出版、1941 年に長崎書店からも出版されていたが、平凡社東洋文庫の一冊として、金子光晴解説付きで 1963 年に『名ごりの夢：蘭医桂川家に生れて』として復刻されている [2]。この復刻作業も、源吉が取り組んだ戦後の研究の一部であると言える。

多田顯は 1915 年生まれで、旅順第一中学校を卒業後、大阪高等商業学校へと進んだ。第二次大戦後は千葉大学で教鞭を取り、その後大東文化大学大学院教授となっている。専攻は日本経済思想史で、石門心学、熊澤蕃山、貝原益軒、二宮尊徳と作田荘一などの研究論文を多数執筆している [12)]。CiNii には、2023 年 8 月 31 日現在、「梅岩に関する小論―性・理・心について」『千葉大学教養部研究報告 A』(1) pp. 91-105 以降、96 件の登録が確認されている。この方向性は「經濟學講座」で既に予告されており、多田の戦中・戦後の研究姿勢の一貫性を感じさせる。

Ⅲ．雑誌『みくに』での多田顯

雑誌『みくに』には第 4 巻 1 号から多田顯の名前が登場している。すなわち、誌友だよりの「参宮だより」（第 4 巻 1 号）である。その後、「この光栄　御親閲を拝受して」（第 5

巻 6 号）、「東部滿洲を旅行して」（第 5 巻 9 号）、「神器池田先生」（第 6 巻 8 号）と続き、第 8 巻 2 号（1942 年 2 月）より「經濟學講座」を連載することになる。1941 年 12 月の真珠湾攻撃後の連載である。講座は三回のみで、その後、翻訳を三回、巻頭言一回、イギリスについての記事が一回掲載されている。『みくに』は 9 巻 3 号で突然終了するが、終了直前まで多田が『みくに』と連携していたと考えてよい。なお、『みくに』8 巻 10 号から 12 号は賀川豊彦批判の特集号であるためであろう、多田の記事は見当たらない。「飜譯『商業帝國主義史』」は岩越元一郎と連名である。多田の経済学的記事が出現し始める雑誌『みくに』第 8 巻 2 号以降の多田顯の記事を表 3 にまとめている。なお、表 3 と表 4 の初出は加藤（2021）である（一部表記の揺れを修正し、フォントを統一している）。

（表 3）　雑誌『みくに』第 8 巻 2 号以降の多田顯の記事

巻・号	年・月	記事タイトル	内容
8 巻 2 号	1942 年 2 月	「みくに經濟學講座」	アダム・スミス研究（其の一）（スミス伝記）
8 巻 3 号	1942 年 3 月	「みくに經濟學講座」 （第二講）	アダム・スミス研究（其の二）（豫定せられたる調和、ベンサムとの違い）
8 巻 4 号	1942 年 4 月	「みくに經濟學講座」 （第三講）	アダム・スミス研究（其の三）（スミスの愛國心、日本國民から見たスミスの論議）
8 巻 6 号	1942 年 6 月	「飜譯『商業帝國主義史』」	はしがき—ユダヤの言語魔術について（岩越） 第一章　重商主義と自由主義　序論（多田） 譯者註（多田）
8 巻 7 号	1942 年 7 月	「飜譯『商業帝國主義史』」（其の二）	第一章　重商主義と自由主義 第一節　重商主義—王侯の抱いた信條（多田）
8 巻 8 号	1942 年 8 月	「飜譯『商業帝國主義史』」（其の三）	第一章　重商主義と自由主義 第一節　重商主義（承前）（多田）
9 巻 1 号	1943 年 1 月	（巻頭言） ※タイトルなし	※昭和天皇 伊勢神宮参拝について
9 巻 2 号	1943 年 2 月	「イギリスの東洋經略と英國思潮」	英國の東方侵略の意圖

出所：『みくに』より筆者作成、加藤（2021）[3] のスライド No.17 と同じ（フォントを修正）

表 3 の破線で囲った箇所が「經濟學講座」であり、いずれも一般読者向けにアダム・スミスの学説を中心に紹介した記事である。「經濟學講座」（第三講）で、多田はスミスの「根本思想と、近世英國の國民思想とが如何なる關係にあるのかを更に深くゝ掘り下げる必要を痛感する」[13)] と述べているため、「經濟學講座」終了後、当時の英国を含む列強の商業帝国主義について、そして、英国の東洋経略と思潮について言及する記事を執筆したと思われる。『みくに』が 9 号第 3 巻で終了してしまうため、中途半端な印象を与える形になっているが、前章でも言及したとおり、多田自身は日本における経済思想を第二次世界大戦後継続執筆している。

表 4 は、上掲表 3 の記事中の、「ユダヤ」「謀略」「維新」「愛國」「國防」「國民的」等への言及回数をまとめている。表中、例えば（×2）とあるのは、その表現が二回出現したことを表している。

（表 4）「ユダヤ」「謀略」「維新」「愛國」「国防」「国民的」等への言及

巻・号	記事タイトル	「ユダヤ」「謀略」等への言及	「維新」「愛國」「國防」「國民的」等への言及
8 巻 2 号	「みくに經濟學講座」	ユダヤの思想謀略、經濟謀略（×2）、思想謀略、 英米露ユダヤ	明治御維新、御維新（×2）
8 巻 3 号	「みくに經濟學講座」（第二講）		國防の任務、愛國者、愛國心 ※国防に言及する愛国者はスミス
8 巻 4 号	「みくに經濟學講座」（第三講）	經濟謀略（×2）	國防（×3）、國民主義者、國民主義乃至國家主義、愛國者、英國の國民精神（×2）、英國々民精神（×3）、英國の國粋運動、英國の國民思想、全體主義的、英國的（以上英国とスミスについて）、日本國民
8 巻 6 号	「飜譯『商業帝國主義史』」	ユダヤの言語魔術、猶太人宰相ヂスレリー、猶太の言語魔術、猶太の謀略、猶太人的考へ ※岩越筆「はしがき」の中で	※日本の大日本帝國主義とイギリスの商業帝國主義との違い
8 巻 7 号	「飜譯『商業帝國主義史』」（其の二）		國家的な政策—即ち重商主義、海軍力と植民的帝國、政治的國家的な君主政治 ※欧州について
8 巻 8 号	「飜譯『商業帝國主義史』」（其の三）		※重商主義=インペリアリズムについて
9 巻 1 号	（巻頭言） ※タイトルなし		「天照す神の御光つたへます現津御神わが大君の任のまにまにつかへまつらむと誓ひ奉る」p.2　※わが大君＝昭和天皇
9 巻 2 号	「イギリスの東洋經略と英國思潮」	彼等の術策 ※彼等=イギリス人	「我國の立場より彼等の歴史を把握することを怠り」「その影響が現時の戰爭遂行上に惡影響を及ぼしてゐるか」p.9 ※我國＝日本、彼等＝イギリス

出所：『みくに』より筆者作成、加藤（2021）[4] のスライド No.19 と同じ（フォントを修正）

これらの数に着目すると、「翻譯『商業帝國主義史』」にかなりの反ユダヤ的な用語が出現しているが、第 8 巻 6 号のこれらの発言は岩越のものであり、また、ユダヤ勢力に対する多田の警戒心の要とも言えるのは、アダム・スミスの学説の批判的読みであると判断できるので、その理由も含めて次章にて「經濟學講座」を考察する。

Ⅳ．考察：多田顯の反ユダヤ的発言の詳細—アダム・スミスの解説と昭和初期の日本における対ユダヤ警戒—

（1）1930 年代・1940 年代日本におけるユダヤに対する警戒心

多田顯をはじめ、『みくに』寄稿者の念頭には、軍国主義というよりは維新（攘夷・神洲防衛）精神の重視があったと思われる。これは、橋川（1984）でまとめられているように、昭和初期の昭和維新という当時の雰囲気とも一致している[14)]。

当時の日本では、ユダヤに関する警戒心が増していた。上記第 I 章で触れた事項に加えて、宮澤（1982）では、犬塚惟重（最終階級は海軍大佐、反ユダヤ的言論人の一人）の 1932 年の反ユダヤ的講演が印刷され海軍省教育局から配布、更にそれを司法省刑事局が再録したこと、また、1938 年の犬塚による反フリーメーソン講演が内閣情報部で印刷された速記録に載せられたこと、などを紹介している[5]。犬塚は「国策として對ユダヤ策が練られ『必要な手段が取られつつあります』」[6] と述べたという。また、宮澤（1982）は、「外務省の外郭団体と目される国際政経学会」[7] が 1936 年 2 月に創立され、機関紙『國際秘密力の研究』が出版されたことを紹介している。『國際秘密力の研究』は国際秘密力を国際ユダヤ勢力だと理解しており、犬塚を始め、『プロトコル』を包荒子のペンネームで全訳（『世界革命之裏面』中に『シオン聖賢集會の議定書』として収録）した安江仙弘（最終階級は陸軍大佐）、キリスト教きよめ会弾圧の中心にいた四王天延孝（最終階級は陸軍中将・衆議院議員）などが寄稿している。四王天は『猶太思想及運動』上・下（対ユダヤ警戒の著、平沼騏一郎序文）[15)]を、安江は『プロトコル』全訳以外に、『ユダヤの人々』（國際秘密力研究叢書第一冊、ユダヤ人の概説も含む）[16)]を著している。安江は後に、樋口季一郎（最終階級は陸軍中将）と共にユダヤ人難民を救済するのだが、そもそも『プロトコル』を日本に紹介した人物でもあるのである。その『プロトコル』の第二では、経済戦はユダヤ勝利の根本である、などと記載されている[17)]。このように昭和初期、ユダヤ勢力にどのように立ち向かい日本を防衛するか―その妥当性は本論文の目的ではないのでここでは論じないが―という議論が高まっていたのである。

明治・大正・昭和初期の日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献数は、宮澤（1982）[8]・宮澤編（1990）[18)]・宮澤編（2005）[19)]・宮澤（2015）[20)]により報告されている。全ての文献が網羅されているわけではないが、1936 年頃より文献数が急増している傾向がわかる。文献数増加の背景と詳細は加藤（2023b）[9] でまとめている。

多田の記事は、このような歴史的文脈の中で執筆されたと考えられる。彼は、西洋からの経済思想流入は―マルクス主義も含めて―ユダヤの謀略であり、それに対して日本は防衛しなければならない、と考えていた。初講「經濟學講座」冒頭に、「ユダヤの思想謀略、經濟謀略」[21)]が、「余威を保つてゐる」[10] と述べ、具体的には、アダム・スミス学説とその波及の考察を軸に多田は「經濟學講座」で対謀略警戒の論を展開している。

（2）「經濟學講座」の対ユダヤ警戒

多田は、第二次世界大戦参戦後の緒戦日本勝利の言論の中に「英米の經濟的略奪根性」[11]を、また、戦時経済統制の中に「既に常識化してしまつたと迄思はれるマルクス主義」[12]を見、これらが日本に浸透しているのを見て、「英米露ユダヤは、正にかゝる結果を待ち望んでゐる」[13]としている。これは、安江（2015）で、ユダヤ人でシオニズム運動を起こした重要人物の一人テオドール・ヘルツルの著『猶太國』の中の言葉として引用したユダヤの戦略、すなわち、「下方に對しては、プロレタリヤと化して社會の覆滅者となり、有らゆる革命黨の下士團を作り、之と同時に上方に對しては、恐るべき我が黄金力を増大せしむるものである」[14、15]と述べられているものを意識していると思われる。

多田によれば、英米に代表される経済的自由主義でもソビエト連邦で実現を見た共産主義思想（多田は、後者はスミス、リカルド、マルクスへと発展したと記している）でも、行き着くところは経済学の創始者としてのアダム・スミスであり、経済的自由主義と共産主義思想に与する英米露ユダヤを討つためにも、まずはスミスについて考察するべきであるとしている[16]。多田の対ユダヤ警戒の要は、スミスの学説の批判的読みなのである[17]。

また多田は、アダム・スミス学説の波及の仕方―自由主義的経済活動に専ら焦点を当てた、いわば片手落ちともいえる波及が、スミスが意図していたか否かは別として、結果論として負の効果を生むと考えられている―も経済謀略と理解していた[18]。

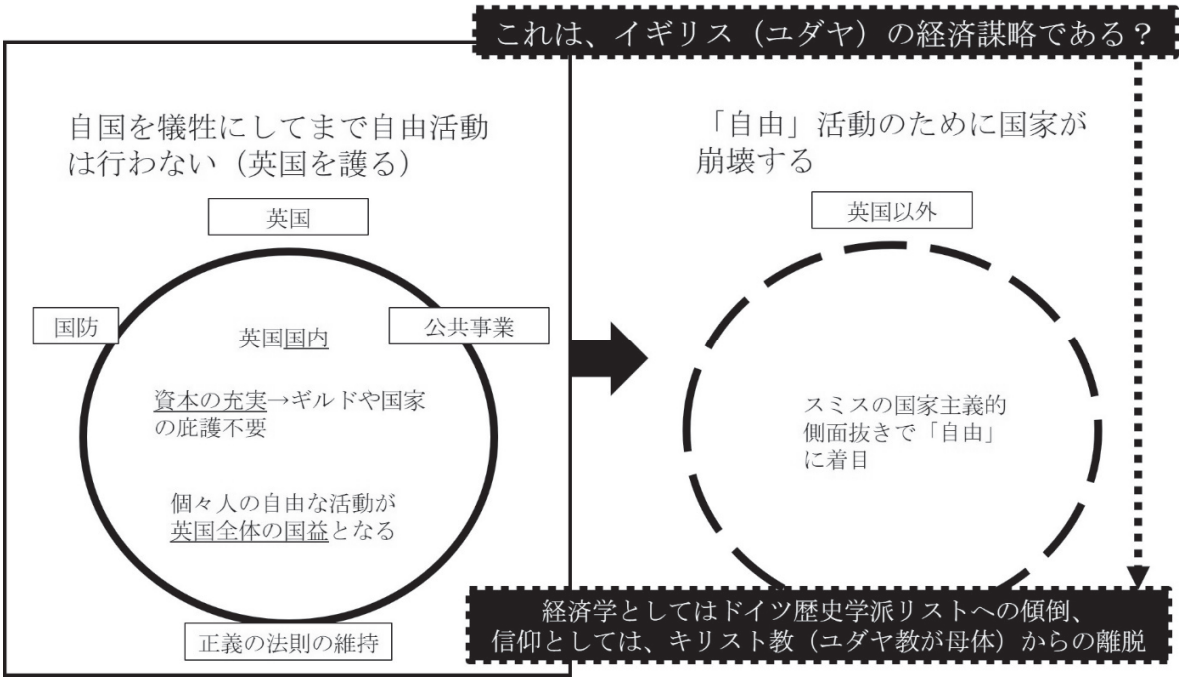
多田は、しばしば混同されるアダム・スミスとベンサムの違い、並びにアダム・スミスの愛国心について強調している。スミスの経済的自由主義は、「各人は、『正義の法則』を犯さゞる限り、自由に個人的な利益を追求してよい。神はかゝる利己的な行爲が自ら『調和せる全體的利益』を齎すように、世界を作つて置いて呉れた」[22)]ことが前提である。一方ベンサムにおいては、「個々人は『豫定せられたる全體』からすら解放されて完全に自由」[19]である。両者の混同を避けなければならない。また、スミスは、「個人の自由が實現されることに依り英國全體の利益が増進され」[20]「國防は富裕よりも遥かに一層重要である」[21]とも考えていた。スミスは愛国者なのであり、彼は自国の国益を損なってまで自由な経済活動をするべきであるとは考えていなかったのである。そこで、国家の主権者は、国益を護るよう、司法行政（正義の法則維持）・国防（他国侵入防止）・公共事業（公共には必要だが個人的事業では賄えない事業）の三任務は果たすべきである、ということになる[22]。この点は、スミスの『国富論』第五編第一章[23)]を基に書かれたものと思われる。

これは、日本に忠心である多田ならではの指摘であろう。自国の国益が前提にあってこそ自由な経済活動が有効になるというのがスミスの立場であるが、現実には、このような前提を知ってか知らずか、自由な経済活動の側面が強調されてスミス学説が日本で受け入れられていることに多田は危機感を抱いている。

更に多田は、スミスの「經濟的自由主義論は、英國の諸外國に對する經濟的優越［中略］を前提としてのみ意味を持ち得る」（中略は本稿筆者による）[23]と指摘している。繰り返し

になるが、スミスは自国の国益を犠牲にしてまで自由な経済活動をしてもよいとは考えていなかった。司法行政・国防・公共事業が前提にあっての自由でなければならない。それに加えて、当該国の経済的優越が自国を守る壁の役割をしている場合には、経済的自由主義論の学説が国益をもたらすというのである。経済面での国益を最大限にするためには、国内での資本が既にある程度充実している場合は、国家の庇護を受けず、「個々人をして自由に經濟活動をなさしめて、生産力を充實」[24] したほうがよい。言い換えれば、国内資本が不十分な国が「スミスの言を無批判に受け容れるならば、自國をして英國の属國たらしむるに至ることを意味する」[25] と多田は警告し、実際、スミスの学説を鵜呑みにしたために自国経済が犠牲となった例としてドイツ、スペイン、ポルトガル、フランスを挙げている[26]。

国を脅かしてまで自由にしてはいけない、という点を見逃してスミスの論を受け入れたらその国は崩壊するではないか。もし、わざとこの点を隠してスミスの論を英国が輸出したとしたらどうなるのだろうか。多田は、そのような波及の裏にはユダヤの力、すなわち、「英米露其他の國々及びユダヤの思想謀略、經濟謀略」[27] があるのでは、と主張しているのである。このように、アダム・スミスの学説、その波及の仕方、そしてユダヤの謀略とが多田の記事の中で結びついている。多田には、スミスの論の日本流入は日本の脅威と映ったに違いない。これが理由で、多田は、経済学としてはドイツ歴史学派リストの学説へ傾倒したのであろうか[28]。多田の「經濟學講座」概略を図にまとめると図１のとおりになろう。



（図 1）多田顯によるアダム・スミスについての解説

出所：『みくに』より筆者作成、加藤（2021）[29] のスライド No.20 と同じ

当時の日本の反ユダヤ的言論と多田顯のアダム・スミスの学説の捉え方の妥当性は、本稿の目的を超えるのでここでは扱わない。しかしながら、事変や大戦中ということもあり、国の護りが日本の大目標であった1930年代から1940年代の前半、日本を脅かしているのがユダヤ勢力であるという日本国内に見られた言論、その文脈の中で「經濟學講座」は執筆され、多田は、アダム・スミスの学説が日本を含む世界各地に波及し、その背後にユダヤ勢力がある、という危機感を訴えている、との構図は示すことができたと思う。

V．付記と今後の研究の可能性

前章までに、キリスト教系最右翼とされる雑誌『みくに』掲載の「經濟學講座」に見える反ユダヤ的言論を紹介し、それが、昭和初期の日本に広まっていた反ユダヤ的言論の文脈の中にあることを示した。本章では、第Ⅳ章までに含めることができなかった事柄と、紙幅の関係等で、本稿で触れることができない事項を基に、今後の研究の可能性について述べたい。

最初に、欧米キリスト教徒の反ユダヤと今泉らの反ユダヤとがもたらしたそれぞれの帰結の相違である。『みくに』では、日本を護るためにユダヤと敵対し、ユダヤ教を母体とするキリスト教からも決別するという方向に向かった。しかしながら、欧米（古くから反ユダヤ的言論がある）では、反ユダヤでも国を護るために反キリスト教にはならなかった。欧米キリスト教では置換神学と呼ばれるものが長らく主流で、キリスト教がユダヤ教を乗り越えた、すなわち旧約聖書のイスラエルは、新約聖書の教会によって置き換えられた、と考える（中川（1993））[24]。そのため、反ユダヤ的でも、それが反キリスト教になることはなかった。そして、キリスト教の側に立つことがキリスト教国である自国の防衛と愛国心に結びついたのであった。また、20 世紀以降の米国では、イスラエル再建をキリスト教信仰の一部に取り込み反ユダヤの立場を取らない福音派キリスト教徒も多い。いずれにせよ愛国とキリスト教は、欧米では相反してこなかった。一方、今泉らは、キリスト教がユダヤ教を乗り越えたとは信じなかったし、かえってユダヤ教が母体であるキリスト教も日本を脅かしていると考えたのであろう、反キリスト教になることが、日本防衛の一環になるとしたのである。

次に、反ユダヤ主義の定義についてである。グッドマン・宮澤（1999）は、日本に見られた反ユダヤ主義の定義を「ユダヤ人が日本を滅ぼし、世界を滅亡させる陰謀を企てている、ユダヤ人は諸悪の根源であるとする空想・錯覚のこと」（下線は本稿筆者による）とするとしている[30]。四王天延孝や安江仙弘、そして彼らも参画した國際政經學會のメンバーなどは、実際にユダヤ人との軋轢を自ら経験あるいは経験した人物を直接知っているので[25]、四王天らの唱える対ユダヤ警戒は一概に空想・錯覚だとは言えないかもしれない。しかしながら、当時の日本人の多く―『みくに』執筆者を含めて―はユダヤ人との直接の接触はなく、ユダヤ人については書籍や講演などから得た上で（例えば、『みくに』には安江仙弘への言及が

ある）[26]、自分の頭の中で反ユダヤの思いを醸成していったのではないかと推測される。反ユダヤ的態度を持つ当時の日本人の多くは、グッドマン・宮澤の定義通りの反ユダヤ主義であると言ってもいいかもしれない。とはいうものの、反ユダヤ主義の定義については単純ならざる議論がある。例えば、一般には反ユダヤ主義者だといわれるヘンリー・フォードであるが、彼の『世界の猶太人網』[31] では、民族的反感に基づくいわゆる反ユダヤ主義との距離を取ろうとしているのだろうか、自分はただあるがままの事実を伝えているだけである、とも述べている [27]。反ユダヤ的言論人として名高い四王天延孝も、自著の中では、いわゆる反ユダヤ主義と対ユダヤ警戒を分けて議論し、自身の立場は後者であるとしている [32]。

何をもって反ユダヤ主義というのか、ユダヤに対する批判は―客観的・建設的なものも含めて―全て反ユダヤ主義とするのか、しかしながらそれは、かえって解決の先延ばしになり、政策が単なる憎悪に変わってしまわないか、とベロック（2016）は主張している [28]。この点を踏まえて、本稿では、「反ユダヤ主義」ではなく、「反ユダヤ的言論」、「反ユダヤ的発言」、「反ユダヤ的態度」、「反ユダヤ」、「対ユダヤ警戒」、などという表現を用いている。反ユダヤ主義の定義については、加藤（2023b）[33] でも論じている。民族差別的な反ユダヤ主義と筋のとおった対ユダヤ批判についての線引きは、今後も論じ続ける必要があるだろう。2023 年パレスチナ・イスラエル戦争は、2023 年 10 月 7 日にハマスがイスラエルを攻撃したことに端を発するとされる。本論文執筆時点（2023 年 12 月 18 日）では、その後のイスラエルによるガザ攻撃に対して批判が集まっている。その批判は人道的観点からの妥当なものなのか、イスラエル存続を危うくするからとして反ユダヤ主義とするのか。中東における長い複雑な歴史論議に加えて、反ユダヤ主義の定義についても議論が高まっている。

最後に、今後の研究の可能性を三点挙げておく。第一の可能性としては、『みくに』の反ユダヤ的言論の推移の詳細を分析・考察することである。前述のとおり、雑誌『みくに』はキリスト教から離れていくが、これは、反ユダヤ的言論を取り込んだことが、ユダヤ教が母体となっているキリスト教からの離脱の大きな要因の一つとなったと思われる。その流れが『みくに』創刊号から最終号まで、どこにどのように見られるかの過程について概略を述べたものはあるが [34]、詳細にわたり解説した研究はまだない。それどころか、1930 年代と 1940 年代前半の日本の反ユダヤ的言論の存在そのものについての研究も多くはない。歴史的事実を丁寧に拾い上げ、全体像をつかみつつ歴史完成への営みを続けていくべきであろう。

第二の可能性としては、多田顯の戦後の諸論文について考察することである。例えば、作田荘一の神道論についての論文であるが、日本的キリスト教系雑誌『みくに』に寄稿していた多田という背景を念頭に置きつつ考察すると興味深い成果が得られるかもしれない。更に、多田は日本経済思想史が専門であるが、経済論だけではなく、その論を唱えた者が拠り所としていたと思われる道徳や哲学、宗教思想についても併せて研究している。「經濟學講座」でも指摘しているように、経済論には、何等かの道徳、哲学、宗教思想が背景にあるという

のが多田の研究視点であり、例えば、山鹿素行については社会経済思想だけではなく素行の私益・公益論にも、作田荘一については経済理論研究だけではなく作田の神道論にも及んで研究成果を残している。経済理論は見える文化、宗教や諸思想は見えない文化に対応しているとすると、文化という視点でも多田の研究業績を考察できるであろう。

第三の可能性としては、20 世紀前半と 21 世紀の現在の世論の比較である。21 世紀の現在、日本だけではなく世界各地でグローバリズムの掛け声と同時にナショナリズムも高まっている。グローバル化の背後に謀略があるとの主張もなされ始めている。あたかも 20 世紀前半の再来のようである。このような主張をしているのは、加藤（2023a）でも指摘したとおり、日本では林千勝、馬淵睦夫らがいる[29)]。また米国では、新型コロナウイルス感染症に関するオルタナティブな報道をきっかけに勢いを増している Stew PETERS らである。20 世紀前半当時の人々が歩んだ道は妥当なものであったのだろうか。我々の行く先はどこにあるのか。20 世紀前半と 21 世紀の言論との比較を通して、21 世紀の我々が進むべき方向を見極めることもできるかもしれない。

注

1 引用文献 1)書、p.122。本文引用箇所の出所は、字句通りの引用の他、本論文筆者がまとめているなども含め、文献内容に触れているものは引用と見做し、初出の場合は引用文献欄に、二回目以降は注の箇所に記した。単に書誌情報のみに言及する場合は表 2 の中にまとめた。

2 今泉みね：名ごりの夢：蘭医桂川家に生れて．東洋文庫 9，平凡社，1963．『みくに』には、森寛子（森有礼夫人、森明の母、岩倉具視の娘）の文章（談）も連載されている。第 1 巻 2 号共鳴欄には岩倉具實（ともざね）（岩倉具視の曽孫）の名前もある。森寛子談は、大島純男編：森寛子 父・岩倉具視の《喰違坂の遭難》を語る ほか．自費出版，2023 としてまとめられた。

3 引用文献 7)書。

4 引用文献 7)書。

5 引用文献 1)書、p.52。

6 引用文献 1)書、p.52。

7 引用文献 1)書、p.92。

8 引用文献 1)書。

9 引用文献 8)書。1935 年には、ユダヤ系の E.D.サツスーン投資会社などによる支援を受け、蔣介石政権による国幣改革法令が出された。中国に進出していた日本の銀行はこの改革の中で甚大なる被害を出している。国際ユダヤ勢力に注目が集まり、1936 年初版の『國際秘密力の研究』でもこの国幣改革について詳細に述べられている。

10 引用文献 21)書、p.14。

11 引用文献 21)書、p.14。

12 引用文献 21)書、p.14。
13 引用文献 21)書、p.15。
14 引用文献 16)書、p.140。
15 本論文中の邦訳は安江（2015）引用のまま。英文は *THE JEWISH STATE* by Theodor Herzl （May 2, 2008），The Project Gutenberg eBook of The Jewish State, Kindle version, 位置 No.1197/2473 に該当箇所がある。原著は *Der Judenstaat*、1896 年出版。
16 引用文献 21)書、p.15。
17 多田の寄稿の中で他に着目すべき点は、戦時統制経済とマルクス主義との類似が指摘されていることである。この指摘は、通常両極端にあると考えられている思想が実は同根であり、目的を同じくしている、という点で、三田村武夫の分析と似ている。三田村は、『大東亜戦争とスターリンの謀略：戦争と共産主義』（自由選書，1987［旧題，戦争と共産主義］）の中で第二次世界大戦前後の思想的連続性を論じている。
18 引用文献 13)書、pp.20-21。
19 引用文献 22)書、p.18。
20 引用文献 22)書、p.20。
21 引用文献 13)書、p.19。
22 引用文献 22)書、p.20。
23 引用文献 13)書、p.20。
24 引用文献 13)書、p.20。
25 引用文献 13)書、p.20。
26 引用文献 13)書、p.21。
27 引用文献 21)書、p.14。
28 引用文献 21)書、p.15。
29 引用文献 7)書。
30 引用文献 6)書、p.1。
31 包荒子解説付きで 1927 年に二松堂書店より日本語翻訳版が出版されている。
32 引用文献 15)、下 p.175。
33 引用文献 8)書。
34 引用文献 9）書、10）書に『みくに』反ユダヤ化の言及がある。

引用文献

1) 宮澤正典：ユダヤ人論考 増補：日本における論議の追跡．新泉社，1982，138.
2) ノーマン・コーン：ユダヤ人世界征服陰謀の神話．KK ダイナミックセラーズ，1986，177 - 199.
3) 黒川知文：ユダヤ人迫害史：繁栄と迫害とメシア運動．教文館，1997.
4) 佐藤唯行：アメリカのユダヤ人迫害史．集英社新書，2000.
5) 西平重喜：日本の世論調査．日本統計学会誌第 21 巻第 3 号（増刊号）:283-287，1992.
6) D.グッドマン・宮澤正典：ユダヤ人陰謀説：日本の中の反ユダヤと親ユダヤ．講談社，1999， 63-73.

7) 加藤知子：雑誌『みくに』掲載の多田顯「みくに經濟學講座」：反ユダヤ主義をめぐる諸問題．日本地域資源開発経営学会　第 10 回大会，2021 年 7 月 17 日，星城大学，Zoom 開催，2021.
8) 加藤知子：反ユダヤ主義の定義をめぐる一考察：20 世紀前半の中国大陸における日猶経済関係に着目して．2023 Conference on Economics and Business，5th of May, 2023, College of Finance and Economics，Aletheia University, New Taipei City, Taiwan，オンライン参加，2023b.
9) 小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題．神学 56：221-249，1994.
10) 藤巻孝之：みくに運動の軌跡：一つの証言：付 山梨公会の場合．キリスト教史談会パンフレット⓱，キリスト教史談会，1983.
11) 大島純男：共助会と「みくに」運動．共助二・三月号：13-36，2000.
12) KINOKUNIYA WEB STORE：BOOK 著者紹介情報．入手先＜ https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784892055126＞（参照：8-31，2023）.
13) 多田顯：みくに經濟學講座（第三講）．みくに第 8 巻 4 号：22，1942c.
14) 橋川文三：昭和維新試論．朝日新聞社，1984.
15) 四王天延孝：猶太思想及運動上・下．ともはつよし社，2016［初版 1941 年，猶太思想及運動．内外書房］.
16) 安江仙弘：ユダヤの人々．ともはつよし社，2015［初版 1937 年，ユダヤの人々．財團法人軍人會館出版部］.
17) 包荒子：世界革命之裏面 再版．二酉社，1925.
18) 宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1877-1988．新泉社，1990.
19)宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1989-2004．昭和堂，2005.
20) 宮澤正典：近代日本のユダヤ論議．思文閣出版，2015.
21) 多田顯：みくに經濟學講座．みくに第 8 巻 2 号：14，1942a.
22) 多田顯：みくに經濟學講座（第二講）．みくに第 8 巻 3 号：18，1942b.
23) アダム・スミス著・高哲男訳：国富論・下．講談社学術文庫， 2020，296-473.
24) 中川健一：エルサレムの平和のために祈れ：続ユダヤ入門．ハーベスト・タイム・ミニストリーズ， 1993：75-96.
25) 國際政經學会編著（船瀬俊介監修）：國際秘密力の研究 第一冊 上．ともはつよし社，2017［初版 1936 年，國際秘密力の研究第一冊 上．国際政經学会］：7-8.
26) 松野重正：恐るべきユダヤ人の勢力 安江仙弘氏の『ユダヤの人々』を讀む．みくに第 3 巻 12 号，27-33，1937.
27) ヘンリー・フォード（包荒子解説）：世界の猶太人網．二松堂書店，1927，4.
28) ヒレア・ベロック（中山理訳、渡部昇一監修）：ユダヤ人：なぜ、摩擦が生まれるのか．祥伝社，2016，328-334.

29) 加藤知子：今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義と反グローバル主義：第二次世界大戦中の『みくに』「賀川豊彦氏の思想批判特輯號」から読み解く．星城大学研究紀要 23：1-16，2023a.